

月の花挽歌 ～9. ^{にちにち}日日平安～

^{にちにち}9.日日平安

9-1

Tにしてみれば、今乗りに乗っている俳優二人との口約束を遅まきながら十二月になって果たしたのは、単に共演したことだけが理由ではなかった。

役者と監督の二足の草鞋を履くことになって二作目の作品を撮るにあたり、同席している男優が準主役で起用された今月の一日にクランクアップしたばかりの映画の話題を食事であげ、それとはなしに俎上に載せたいという思惑もあってのことだった。

Tが探りを入れておきたかった映画とは、秀作を数多く発表してきた森田芳光監督が四十五年ぶりにリメイクする黒澤明監督作品の『椿三十郎』であった。

偶然の悪戯と言ってしまうとそれまでのことだが、Tが温めてきた企画『人情紙風船』と『椿三十郎』とは、主人公は共に落ちぶれた素浪人で、仕官の口をなりふり構わず得ようとするとか、一歳違いの山中貞雄と黒澤明は東宝のスタジオで交流があって、山中脚本の『戦国群盗伝』を再映画化する際に、黒澤はシナリオを担当していたとか、構想を進めるタイミングも軌を一にしているとかなどが、申し合わせたかのように同調している。

とは言え、製作費や知名度を比較しただけでも、相当なギャップがあることは明かだったので、Tは当方の制作発表は『椿三十郎』の公開を見据えてから、先送りした方が得策であるかないかと逡巡していた。

ところが、Kと遭遇したことで映画人魂に火をつけられたTは、躊躇いを捨てて思いのたけを打ち明けることになった。

たった今のTとKの話のやり取りを目の当たりにしていた長身の人気男優は、『椿三十郎』が無事にクランクアップしたことで気が緩んでいたのか、Tと夕食を共にしながら警戒心も持たないで聞かれるままに受け答えしていたあれこれを省みて、砂をかむような思いに駆られていた。

先ほど投げかけた「Tさんも人が悪いですね。～」の言い分を反芻しつつ、その口上の甘さを悔やんだ男優は「私もキャスティングしてくれないと後悔することになりますよ」と真顔で言い切った。

「ここにもう一人います」と脱ぎっぷりのいい女優は相乗りでもするかのように訴えた。

「こうなったら、まとめて面倒を見るしかないですね」とKは冗談半分に言ってから、返答に詰まっているTの表情を捉えて可笑しがった。